

Title	中井履軒『孟子逢原』の王道観
Author(s)	池田, 光子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 36 P.35-P.49
Issue Date	2002-12
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/12372">http://hdl.handle.net/11094/12372</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 中井履軒『孟子逢原』の王道観

池 田 光 子

懷徳堂は享保九年（一七二四）、大坂船場に「五同志」と言われる有力町人達の出資によって開設された学問所である。懷徳堂の初代預り人であり二代目学主となる中井整庵（一六九三〜一七五八）の奔走により、享保十一年（一七二六）には將軍徳川吉宗の官許を得る。

初代学主に三宅石庵（一六六五〜一七三〇）、助教に五井蘭洲（一六九七〜一七六二）を迎え、懷徳堂の体制が成立する。懷徳堂の学問は、石庵の学風が朱子学、陽明学と諸学の良い点を折衷して取り入れていた独特の学問であったため、「鶴学問」と評されたが、助教の蘭洲により朱子学が懷徳堂の基本路線とされるに到った。

中井履軒（一七三二〜一八一七）はこの蘭洲に師事して、学問を修めた。履軒の学問姿勢は、諸家の意見を参看しつつ、そこから独自の意見を打ち出すもので、名賢鉅儒の尊信する所であつても、誤りが有れば反駁して正し、孔子・孟子の本旨を得ることを目標とした妥協を許さないものだった。<sup>(1)</sup> 履軒は自らが注釈を施すにしても妥協を許さなかったため、経への注釈は数度繰り返されることとなり、最初の注である『逢原』、次に経書の欄外に記した『雕題』、それを整理した『雕題略』、晩年に大成した『逢原』の四種を編み出すに到る。<sup>(2)</sup>

本稿で扱う『孟子』もまた、履軒の注釈の対象であった。

『孟子』には王覇の論という思想がある。それは、統治形式を徳を以て政治を行うを王道、力を以て制するを霸道と弁別するものである。孟子の生きた戦国期は、周王朝が衰微し、所謂五覇が登場した後の時代である。こうした社会状況の中で、孟子は王道による統治を提唱した。この思想は日本でも論議の対象とされ、江戸期においては太宰春台や藪孤山等が自説を展開しているが、履軒もまたそうした人物の一人としてよい。

本稿では中井履軒研究の一環として、履軒の王覇論の思想的特徴を考察していく。なお、考察するに当たっては履軒の最終的な完成形態である『孟子逢原』<sup>(4)</sup>を中心とし、内容・記載が、自説を整理することなく書き入れている『孟子雕題』<sup>(5)</sup>と大きく異なる場合には、そちらについても触れることとする。

## 一 「王道」の解釈

履軒の王道観を探るにあたり、まず「王道」という語にどのような解釈を与えているのかを考察する。

『孟子』梁恵王篇に以下の話が掲載されている。恵王が、自分は一生懸命に政治に取り組んでいるが、隣国の民が減るわけでも、自国の民が増えるわけでもないのはどうしてか、と孟子に尋ねる。当時、人口問題は国力に直接影響するので、恵王の問いは切実である。これに対し、孟子は五十歩百歩の譬えを挙げ、恵王の政治は他国の政治と大差が無いことを説き、その後具体的な統治例を出す。その中で「生を養い死を喪して憾み無きは、王道の始なり。」(養生喪死無憾、王道始也)という一句が登場する。ここに見える「王道」が『孟子』経文中に見られる唯一の「王道」の用例である。この一句に対して、朱子は

然るに宮室に飲食するは生を養う所以にして、棺槨を祭祀するは死を送る所以にして、皆民の急する所にして無とするべからざるものなり。今皆以て之に資する有れば則ち人恨む所無し。王道は民心を得るを以て本と爲し、故に此を以て王道の始とす。

と注する。すなわち朱子は「養生喪死無憾王道之始」の一句を「養生喪死」「無憾」「王道之始」と三分割する。そしてまず「養生喪死」を具体的に説明し、「養生喪死」とは民にとって急務であり、為政者が無視してはならない要所であると位置づける。為政者が民の「養生喪死」を満足させるとき、「民が為政者を恨（憾）む」ことはなくなる。これが朱子の解する「無憾」である。物質的な困窮が無くなることは、民の上に対する不満をなくすこととされるのである。

以上が「養生喪死無憾」に対する朱子の解である。これを「王道の始」と結合させるために、朱子は「民心を得」ることは王道の「本」であるとする説を示し、これを利用した。すなわち「養生喪死無憾」は民心を得ることに他ならず、民心を得ることは王道の「本」なのだから、転じて「王道の始」でもある。ここに「養生喪死無憾」と「王道の始」との結合が完成し、経文の解釈が完了する。

だが朱子注を敷衍させて考えれば、「養生喪死」を満足させることが「民心を得」に通じて、上を「憾」まないようになるとされるのであるから、ここでの民とは単純に物質的に満足させれば為政者に対して従順になる存在ということとなる。ここで朱子は、「民」という存在を、物質的な満足感を与えればその心を得られる安易な存在として捉えている。しかし、履軒は、物質的側面から民心を得ることを「王道の始」とする朱子の形而上的な考え

を批判する。ここは『逢原』よりも『雕題』のほうが詳しいため、『雕題』の文を用いて考察をすすめる。(なお、当該箇所では『雕題』を引用する際、内容が『逢原』と大きく異なる場合は註をつける。以下、同じ。)

「養生喪死無憾」とは只是れ財用上の説に在り。元は甚だ重ならず。未だ王道の基本と為すに足らず。然れども王道を行うに当に是を以て下手の初めと為すべし。其れ「無憾」と云うは人々食材給わざるの憾無きの謂なるのみ。民の上を恨まざるを謂うに非ざるなり。則ち未だ道立たざれば、民心を得るも亦た未だ王道の基本を為すに足らず。註恐らく舛う。(『雕題』梁惠王篇)

「養生喪死」とは経済的な問題にすぎず、それ以上でもそれ以下でもない。それよりも重視すべきは「道」である。「道」が存在しないところでは、いくら民心を得てもそれは王道へと通じることはない。朱子のように物質的な満足をそのまま「王道の始」とすることは、履軒には納得出来ないことなのである。

履軒が「道」を重視する姿勢は、履軒自身の生き方にも表れていたように思われる。履軒は中井家の次男として生まれ、仕官をせずに一生を送った。たとえ仕官の話があっても天子から命令が下されている世の中で無いならば仕官しないという態度を貫いた。<sup>(6)</sup> この態度はここでの朱子批判と軌を一にするものと考えられよう。

さて、このように履軒は、王道において「道」の有無を重視した。その立場から朱注の批判を徹底的に行う。

憾、遺憾なり。謂うところは不足とする所有りて心に慊む。註、憾を以て上を恨むと為す。故に民心を得るの説を生ずるのみ。(同前)

履軒によれば、「憾」とは不足に対する嫌悪を示す語であり、上にいる統治者とは本来的に無関係な語であるにも関わらず、朱子は統治者の存在を含めて「憾」を解してしまい、「憾」を「上を恨む」としてしまった。そのために「民心を得」という説を立てたとするのである。

以上からすれば、履軒の解は、「養生喪死」を満足させることは王道実践の第一歩、換言すれば方法論としては正しいが、それはあくまで「王道の始」にすぎないのであり、「養生喪死」を直接に王道の本とすることは認められないと要約されよう。王道とは「道」の問題であり、「養生喪死無憾」或いは「民心を得」といった形而上的な思想ではない。王道とは民衆との関係から述べられるべき存在ではなく、独立した存在として捉えられるのである。「孟子」経文には、他に「王道」の語が存在しないため、履軒の王道観を直接に探るのは困難である。よって、間接的ではあるが、王道と対になって「王霸」と称される霸道について考え、そこから履軒の王道観を探っていく。

## 二 履軒の霸道観

孟子曰く「堯舜は之を性とす。湯武は之を身にす。<sup>(7)</sup>五覇は之を仮る。久しく仮りて歸さず。悪んぞ其の有に非ざるを知らんや。」(『孟子』尽心篇)

この章は、堯舜・湯武・五覇を並列している箇所である。この箇所において、履軒は「覇」について具体的な注解を附しているため、ここから考察を始める。

はじめに朱子注を見ると、朱子は厳しく五覇を否定していることが分かる。

堯舜の天性は渾全にして修得するに仮ならず。湯武身を修めて道を体とし、以て其の性を復す。五霸は則ち仁義の名を仮り、以て其れ貪欲にして私を濟らすを求むるのみ。

堯舜の性は「渾全」であり、「仮」のものではなく、十全なものである。湯武は堯舜には及ばずとも、努力によって「身を修めて道を体し」、そうすることで堯舜の性を保持することが出来た存在である。だが五霸は「仁義の名を仮り」た存在にして「貪欲」であり、「私」を行う存在とされる。ここに朱子が五霸に否定的だったことを看守することが出来る。他方、履軒は「五霸」を聖人に近い存在として肯定的に解釈する。

聖人の性は壞無し。故に修むるに仮りずして、可なり。習うこと豈に少なかるべけんや。譬うるに九章算術、曆術推歩の如きは、生知の聖と雖も、習学を経るに非ざれば、必ず得ず。但だ凡人とは遅速有るのみ。其の他は此に由りて推すべし。道を体するとは、是れ後世の語なり。含糊にして用うるに中らず。宜しく道を履むと云うべし。五霸の仮る所、亦た仁義の実のみ。其の徳称するに足らざる者に非ずと雖も、然れども大概摹倣にして行う。所謂之を仮るなり。(中略) 註、名を借るとは、従うべからず。五霸も亦た英豪の氣象あり。世を匡し、民を救うの念有り。頗る其の功有り。但だ純なること能わざるのみ。未だ偏るに貪欲を以て之を罵るべからず。註、貪欲にして私とは、貶斥の過当なり。(『逢原』尽心篇)

履軒は、「霸」が「仁義の実」は所有しているとする。それ故に「五霸」は英雄の氣象や経世済民の意志を持っているのであり、その意味では「五霸」は聖人に近いのであるが、「純なること能わず」という点だけが聖人と異

なるのである。すなわち様々の限定が附されているとはいえ、履軒は五覇を肯定的に捉えているのである。では、霸道が王道に至るに足りないのは具体的には何であろうか。「仮」の解を中心に、公孫丑篇の一文から考察を加える。

孟子曰く「力を以て仁を仮る者は覇たり。覇は必ず大国に有り。徳を以て仁を行う者は王たり。王は大を持たず。湯七十里を以てし、文王は百里を以てす。」（『孟子』公孫丑篇）

この章においても、尽心篇と同様に「仮」の語が見られる。この章に対する朱子注は以下の通りである。

力とは土地甲兵の力を謂う。仁を仮る者本は是の心無くして其の事を借り、以て功を為す者なり。覇とは齊桓晋文の若きは是なり。徳を以て仁を行えば、則ち吾の心を得る者自り之を推し、適きて仁に非ざる無し。

朱子は「力」を具体的に領土と武力とに設定する。覇とは仁の心は無いが、その力を使い形だけをかりて功績をあげる存在とする。ここでの「覇」も、前述の尽心篇の「五覇」と同様、否定的に捉えている。では履軒はどのような注解を施しているか。

覇は必ず大国の資有り。事を済ますに方りて、若し大国無ければ、則ち力小なり。饒使仁を仮るも、亦事を済まさず。

註、「本は是の心無く」とは、宜しく「是の徳無く」と言うべし。「心に得る」とは宜しく「己に得る」と言う



べし。是の章、仁は専ら事を行うを以て言い、徳は専ら己に有るを以て言う。(『逢原』公孫丑篇)<sup>(8)</sup>

覇の条件は、まず大国であることである。大国でなければ「仁を仮」りても何も出来ないときれる。履軒は経文の「力」を「大国の資」と解しているが、具体的にはそれは武力等を指すのであろうから、朱子と大差はない。だが履軒は「仁を仮る」を朱子が「是の心無く」と解することには反発し、「心」ではなく、「徳」が無いとするべきと主張する。尽心篇と併せて考えると、朱子にとって覇は仁義を保持しない存在であった。だが履軒にとって、覇は「仁義の実」は保有しているとされている。ただ、その性が「純なること能わず」というところに問題があるのである。では何が「純」であることが出来なかつたのか。それは「徳」であつたと履軒は考える。尽心篇では「徳」称するに足らざる者に非ず」と言い、その徳を一応顕彰しているが、「純なること能わず」であれば、その欠陥はどこかに必ず表れる。履軒はそれが「徳」の量的な面に表れると考へたのである。

なぜなら、履軒にとって「仁」とは行動の中に表れるものであり、「徳」とは己の心に存在するのである。覇の行いは「夏を撫し夷を攘す」(後述)のものであれば、その動機はどうであれ、その行いは仁のはずである。

また履軒にとって「仁」とはまた、「心」から生まれるものであつた。覇は「仁」の行いがあるものであるから、「心」が無いことにはならない。そこで「心に得とは宜しく己に得と言うべ」きとし、本来的に己に備わる「徳」の点から、王覇の別をつけるのである。

以上からすれば、履軒のいう覇とは、「徳」を失つた王と言うべき存在であり、決して否定されるべきで無く、覇と王とは「徳」の点に差が出るも、同一直線上に位置する存在であるとされ得よう。

だが、『孟子』全体を通じて、覇をこのように捉えることは、非常に困難なことでもあった。そのため履軒の覇論は、解釈に限界を生じることとなる。以下、履軒の解釈の限界を見ていく。

### 三 履軒における霸道観の限界

公孫丑が「夫子、路を齊に当たれば、管仲・晏子の功、復た許すべきか。」と質問した際、孟子は曾西の言葉を用いし、「管仲は君を得ること、彼の如く其れ専らなり。国政を行うこと、彼の如く其れ久しきなり。功烈、彼の如く其れ卑しきなり。」と言って管仲を否定した。

孟子の否定した管仲に対して、朱子は「管仲王道を知らずして覇術を行うが故に功烈の卑と言う。」と言い、管仲は王道を行うべきだったのに霸道（覇術）を選んでしまったことを非難し、それ故に「卑」とするのである。朱子はここでも霸道を否定的に捉え、管仲を霸道を行った者と解する。これに対して履軒は異なる見解を述べている。

功烈、宜しく其の成就する所を論ずべし。未だ王覇の邪正を以て論を立つ可からず。唯だ其れ王道を知らずして諂詐の術を用う。故に其の成就する所は厖厖として少康に期し、瑕を掩い臭に蓋をす。苟且、天下の暴乱を弭し、九合一匡の功を立つと雖も、未だ嘗て天下の心服を得ず。其の施設、唯だ目前を営みて百年の規無し。猶お氷を日中に暴すがごとし。此れ之れ功烈の卑と謂う。（中略）註及び諸家皆徒に術の邪正を論じて功の崇卑に及ばず。故に言帰着無し。豈に管仲の功を以て崇と為さんや。其れ試みに文王を以て之に比し、其の崇卑を較ぶるや自から知る可し。（『逢原』公孫丑篇）

朱子が覇論を用いて管仲を理解するのに対し、履軒は王覇の論を用いて管仲を理解するべきではないと言う。そもそも履軒にとって管仲は、一時的に天下に小康状態をもたらしたにすぎず、その方法も「瑕を掩い臭に蓋をす」と言うように、根本的な解決が出来なかつた人物であつた。天下の心服を得ることも出来ず、百年の計も無く、太陽にあてられた氷のようにとけて消えてしまふ存在であつた。こうした管仲の在り方こそが、経に言う「卑」であると履軒は言う。

履軒が朱子注を拒否して管仲を覇者と認めないのは、履軒が王覇とは同一直線上にあり「邪正を以て」論ずるべきではないと考えていたことに依る。すなわち、朱子と履軒との王覇観の相違に基づくためであろうが、ここで注目されるのは朱子が覇道にあると認める人物が、履軒にとって必ずしもそうだとは限らない点である。この場合、経が管仲を否定している理由を、朱子は経が管仲を「覇」と捉えた上での否定と解釈し、履軒は行動が問題解決に到っていないため否定された、と解釈する。これは管仲を否定するプロセスの違いとして解釈され得ようが、経文自体が覇道を否定的に捉える場合、履軒の注釈はそこで行き詰まることとなる。そして『孟子』中で覇道を否定的に捉えている章が告子篇に見られる。

この章において、経文は「五覇とは三王の罪人」と述べ、「五覇」を「罪人」とする。この箇所に対し、朱子注では次のように述べる。

趙氏五覇と曰うは斉桓、晋文、秦穆、宋襄、楚莊なり。(中略)丁氏曰く夏昆吾、商大彭、豕韋、周斉桓、晋文、之を五覇と謂う。

朱子は経に対して特に注を加えるでもなく、「五覇」の具体的な名前を二例挙げるに止まる。それに対して履軒は、独自の霸道観から次のように五覇を組み替える。

宋襄は覇を図りて成らざれば、焉んぞ覇と称するを得んや。楚は是れ夷狄の君長ならん。呉夫差の等なるのみ。当に予るに覇名を以てすべからず。且つ覇業は夏を撫し夷を攘するを以て功と為すに、楚荘は夏を猾するの巨魁にして、当に誅すべきの鯨鯢ならん。焉んぞ覇数に入るを得んや。夫れ晋文の後、世々盟主と為る。君幼くして大夫政を為す時と雖も尚お諸侯の盟を主る。況んや襄悼の二公をや。尤も傑然として其の威靈、多くは文公に譲らず。宜しく宋襄楚荘を除き、易えて晋襄悼を以てすべし。

晋文の前、已に五覇の称有り。此れ則ち夏殷を通じて焉を数うる者、此の五覇に非ず。当に別論にすべし。丁説当に削るべし。

古の五覇、齊晋無し。(「逢原」告子篇)<sup>(9)</sup>

「五覇」を「罪人」として否定的に捉える経文に対して、同様に覇を否定的に捉える朱子は特に注を加えない。「五覇」の具体的な名を挙げるのみである。対して覇を肯定的に捉える履軒は、まず「五覇」の内訳を再設定する必要に迫られる。

尽心編において履軒は、覇が「仁義の実」を持つと考え、公孫丑篇では「仁」とは行動に表れるとした。ここで覇を組み直すに際し、「五覇」の中から宋襄は覇業を成し得なかつた人物として排除し、楚荘は「夏を撫し夷を攘する」といった「仁」の行動に乗っ取っていないと考え除外する。この二者を除き、晋襄、晋悼を入れることで、

朱子とは異なる「五霸」をたてる。

覇を否定的に捉える朱子に対し、履軒は「仁」を指標として独自の五霸を設定することで反駁を加える。ここでも履軒が覇を肯定的に捉えていることが理解され得る。しかし経文が「五霸」を「三王の罪人」として否定的に捉えていることに対する履軒の注釈は無い。履軒の霸道観の性格からすれば、それは注釈しなかったのではなく、出来なかったのではないだろうか。もしそうだとすれば、ここに履軒の霸道観の限界が窺えることとなる。

#### 四 まとめ

本稿では梁惠王篇の「王道」に対する注から、履軒が王道を物質的な事や民衆から切り離し、「道」を中心とした独立している存在として認識していたことを明らかにした。「王道」の字が経文に見られるのはこの箇所のみであったため、次に履軒の霸道観から王道観を探ることとした。履軒は朱子とは異なり、「覇」を否定せずに、行いが「仁」であるものの、「徳」を持っていない存在と考えていた。この点のみが王道と霸道との差異であるとし、霸道を王道の同一直線上にある存在とする。だが、この解釈で経文を捉えることに限界が生じる。経文が覇者を否定的に述べている箇所において、履軒の霸道観から解釈することが困難となるのである。困難となるも、履軒が覇者を肯定するのは、王覇という設定を他の存在に重ねて考えていたからではないだろうか。

履軒への評を踏まえ、履軒が生涯仕官しなかった理由を考えるに、当時の政治状況を王覇論の観点から考えていたことが推測される。江戸期の政治状況を考えてみると、履軒は王覇をそれぞれ「天皇」と「將軍」という存在と重ねて考えていたのではなからうか。この点に関しては、履軒が史論を述べた著作である『通語』と併せて考察す

る必要があろう。

今後は、王霸を同一直線上で捉えた履軒が、君臣関係についてはどの様に解釈していたのか、また、「仁」「徳」等の徳目についてどの様に解釈していたのかについて考察をすすめるとともに、冒頭で述べたように、同時代の邦儒と比較することで、履軒の思想の位置を考察していきたい。

### 註

(1) 西村天囚『懷徳堂考』（懷徳堂友の会 一九八四年）で天囚は、履軒の学問姿勢への評として以下のように述べる。「其の経を治むるや、宋儒の説に就きて宋元明諸家の見を参取し、群言を折衷するに自家の独見を以てし、苟も意の合わざる所あれば、名賢鉅儒人の尊信する所の者と雖も、弁駁規切して廻避する所なく、一に孔孟の本旨を得んことを期せり」

(2) 『古詩逢原』巻首に以下の文がある。「余壯歳先ず逢原の著あり。既にして増加改定する所多く、塗抹重複して読む可らざるに至り、乃ち細かく書写し本経の上頭に在り。故に更めて以て雕題と命ず。爾後三十年、塗抹益々甚だしく増加し、（中略）復た他人能く読む者非ず。学ぶ者或いは観ること請うもの、応ずる能わず。是において雕題の略を別行する有り。唯だ略すなり。故に其の説不備。乃ち別に一通を写して之を詳備せんと欲すも、又其の繁浩なるを畏る。蓋し旧書の纂する所、宋明諸家、皆其の氏号を存す。（中略）若し本説の氏号を欲求するは、雕題詳略存す。書成遂し旧名に復す。」

(3) 太宰春台『斥非』、藪孤山『崇孟』。両書とも『日本儒林叢書』論弁部に収められている。

(4) 以下、釈読に際しては、大阪大学懷徳堂文庫所蔵『孟子逢原』を底本とする。

(5) 以下、釈読に際しては、大阪大学懷徳堂文庫所蔵『孟子雕題』を底本とする。『孟子雕題』は朱子の集註本に履軒の注が書き込まれている。なお、『孟子雕題』は『孟子雕題略』と併せて、懷徳堂記念会より懷徳堂文庫復刻叢書十二として一九九九年に復刻刊行されている。

- (6) 山田三川（一八〇四—一八六二）の評として『想古録』に以下の文がある。「礼樂征伐の天子より出づる世とならざれば、志の行わるる者にあらずと決意し、諸藩に仕えず、其身を終われり」また、西村天因は『懷徳堂考』（前出）において、「履軒の志は王道に在り」と評している。
- (7) 履軒は「身」の字を「反」に置き換えて解釈している。
- (8) 『雕題』「存疑云えらく覇者必ず個大国に有り。事に方りて成得ず。若し大国無ければ、則ち力小にして以て仁を仮るに足らず。張南軒云えらく徳即ち仁にして徳行を以てすを曰う。仁とは此の章仁事を以て言う。徳字専ら以て己に有りての言。註心宜しく己の身に或るに作るべし。」
- (9) 『雕題』においては「尚お諸侯の盟を主る」が「尚お覇業を失わず」に作る。また「五覇の成は宋襄を除きて晋襄を補うの一説を備うべし。晋悼も亦不可無し。亦以て楚莊を除くべし」の一文が『逢原』には見られない。他は字句が異なるも同様の意。

## 中井履軒的《孟子逢原》的仁德觀

池田光子

懷德堂爲享保9年誕生於大坂的學問堂。在那里學習過的中井履軒爲了得到本旨，提出了自己獨特的意見。本論文作爲履軒研究的一環，對於《孟子》中的履軒的“王”論“霸”論的思想特征，以《孟子逢原》爲中心進行考察。

對於經文中的“王道始”，朱子作以物質來贏得民心視爲仁政的開始的形而上的解釈。而履軒却比形而下的問題更重視“道”。他認爲沒有“道”，即使贏得民心，也不能履行仁政。

其次，關於“霸道”的研究。履軒與朱子不同，他肯定“霸”的存在。他認爲“霸”中保有“仁義之實”。即使“霸”與“王”在“德”上產生差，是因爲他們存在於同一條直線上。他認爲“仁”是體現在行動上的，“德”爲體現在心中的存在。對於“霸”來說，無論動機如何，都有“仁”的行爲。對於把管仲視爲“卑”的經文，履軒認爲不應該以“王”論“霸”論來理解管仲。在履軒的眼中，管仲的行爲里不存在仁。履軒認爲，這一點爲經文所說的“卑”。可是經文自身在否定“霸道”，所以履軒的解釈也就行不通了。

對於把“五霸”叙爲“罪人”的經文，肯定“霸”的履軒把“仁”作爲指標，設定獨自的“五霸”。可是對經文中的“罪人”的部分，履軒却没有作任何解釈。從這里也可以看到履軒的“霸道”論達到了極限。

通過本論文闡明了履軒的王道是以“道”爲中心的獨立的存在的思想。其次，說明了他不否定“霸”，認爲行爲爲“仁”，而“德”不足。可是，對於經文中的否定“霸”的部分，以履軒的“霸道”觀來作解釈會有困難的。今後在履軒的其他著作中，對於履軒是持有甚麼樣的統制觀，作以進一步的考察。

キーワード：懷德堂 中井履軒 孟子逢原 王霸